

韋提希夫人に就いて

松 永 大 覺

淨土真宗の正所依の經典、淨土三部經の一部である觀無量壽經は韋提希夫人と云ふ一婦人を相手として説かれてゐる經典である、韋提希夫人とは一國（其の當時の摩迦陀國）の妃として何不自由なく一生涯榮華榮耀に耽ることの出来る地位にある婦人である、其の婦人が人生のはかなさ、人間的苦惱の爲に悶え狂い續けて最後に佛道を求めるに至るのである。その韋提希夫人を述べる前に

女性を佛教に於ては如何に觀ているかと云ふことについて少し述べ様と思う。經典の上では非常に悪く女性を觀てゐるのである例へば「外面如菩薩内心如夜叉」とか「五障三從シヨウの女人」とか、或は「假令大蛇を見るときも女人を見るべからず」とか、「熱鐵をもつて眼中を剗るとも、散心をもつて女子を邪視してはならぬ」とか、或は又「女人は非常に罪惡の深いものであるが故に魔王になることも佛になることも出来ない」と云つて到る所に痛烈に批判してゐるが然しそれは女性を悪く云はんがために云つてゐるのではなくて、これは女性の自覺を引き起させんが爲であると思ふのである。又これに反して母親を非常に讚美してゐるのである。例へば心地觀經と云ふ

經典には母親の十徳を擧げ、又勝鬘經には勝鬘夫人の偉大さを賞讃し或は又華嚴經には女性の地位を高く評價してゐるのである。乃ち經典に於ける最も大事な問題は女性の善惡よりも愚痴の多い、無智の女性を救ふことが佛敎の根本問題でなければならぬのである。故に愚痴無智の代表的な女性韋提希夫人が魂の底から救濟されることはやがて一切の女性の救濟といふことになるのである。

こゝに一人の女性韋提希夫人を取り上げ經典と照合して人間性を追求していこうと思ふ。これは印度に於ける約三千年前に起つた痛ましい物語りではあるが其のまゝ今日我々の問題である。一人の女性と云つても全人類を代表する所のものであり、又時代は遠く離れてゐても人間の心性に變りのないこと、何時の時代に於ても人間が生きる爲の苦惱の深さ、生きることの難かしさを明かにして最後に佛の慈悲によつて救はれてゆくことを述べてゆきたいと思ふのである。

二

觀無量壽經は摩迦陀國の王宮王舍城に於て正しく韋提希夫人の爲に微妙の法を説き給ふのであるが本願寺第八代蓮如上人は御文章の四帖目第三通に

「むかし釋尊は靈鷲山にまじくして一乘法華の妙典をとかれしとき提婆阿闍世の逆害ををこし釋迦韋提をして安養をねがはしめたまひしによりて、かたじけなくも靈山法華の會座を没して王宮に降臨して韋提希夫人のために淨土の敎をひろめまし／＼しによりて彌陀の本願このときにあたりてさかんなり、このゆへに法華と念佛と同

時の教といへることはこのいはれなり」と。

示して觀無量壽經出現の由來を述べられてゐるのである。何故に韋提希夫人一人の爲に斯ゝる微妙の法を説かれたかと云へば凡そ人間が人間であるかぎり生きることの難かしき、人生の苦惱の行きづまりが必ず來るのである。斯くの如き人間の代表として韋提希が觀無量壽經に登場してゐるのである。而して韋提希は人間として全人類の前に立つてゐるのである。

法華經の説法を中止して釋尊が王舎城まで行かなければならない程の事件とは何であるか、其の事件とは釋尊の從弟に當る野心家の提婆達多が宗教界に於ける覇者たらんとする大野心を起し勢力擴張の爲釋尊教團に對抗してゐつたのである。この叛逆者の策略に道を迷つたのがまだ世なれない弱年の王舎城の太子阿闍世であつた。阿闍世をそゝのかして自立せしめて自分は其の師父として實權を握らうと企てたのである。青年阿闍世は手もなく老獪提婆の甘言に乗ぜられるのである。阿闍世は提婆にそゝのかされて自らの實父頻婆娑羅王を生れながらの仇として暴力を以て七重の牢獄の中に幽閉したのである。阿闍世は何故斯くの如き恐るべき悲しきことを敢てしたかと云へば頻婆娑羅王は老年に入ろうとして尙世嗣の王子のなきことを悲しみ其の當時印度の習慣として占相師に占相を立てさせたのである。ところが占相師の言葉によると毘富羅山と云ふ山の森林に修行する仙人(苦行者)が死去すると彼が王子として生れて來るであらうが而し彼には未だ三年の壽命があるとの豫言を信じて早く子供を得たい爲に彼を殺害したのである。彼が殺されると聞もなく妃の韋提希は妊娠したのである。韋提希の御産が近づくにつれてこれまでの經緯が氣になつて又占相師に占ひを立てさせたのである。所が占相師は産れ出る子は

男子であるが成長の曉には必ず父君を害するであろうと豫言したので韋提希は非常に悲しみ、苦しみの結果生れる出る子を闇から闇へ葬る決心をするのであるが而し葬ることが出来ずして王子の命が助かるのである。命が助かると韋提希は恩愛の情に引かされて暗い思ひで養育するうち王子阿世は成長し、年と共に暴君の血が動き出すのである。斯くして王舎城に於ける一大悲劇の幕が切つて落とされるのである。

苦行者が王子に生れかはつたと云ふ様な傳説は今日我々近代人の感覺より見ればたゞ一笑に付せしむる位のものであろうが而し二千五百年以前の昔の印度の時代相を考えなければならぬ。而して又數多くの悲劇は一寸したことから起るのも事實である。提婆達多はこの不思議な世上の噂を種にして阿闍世をそゝのかし王舎城を現世からなる地獄に落とし入れしめたのである。

これを親鸞聖人は觀無量壽經和讃に

「頻婆羅王勅セシメ 宿因ソノ期ヲマタズシテ

仙人殺害ノムクヒニハ 七重ノムロニトデラレキ」と、

七重の牢獄に投ぜられた頻婆娑羅王は非常に心は平靜であつたのである。それは早くから釋尊の教を聞いて居つたと云ふことから想像することが出来るが而し生命の維持して居つたことは妃の韋提希夫人が秘かに酥密をもつて麥粉をねり、身體を淨め胸に塗り瓔珞の中に蒲桃の汁を容れてローソクの蠟で閉ぢて王を尋ねてすゝめて居つたのである、ことから推察するに韋提希夫人は恭敬してゐる王を何とかして生命をとりとめんと種々に苦慮したことに違ひないのである。そうして釋尊の弟子中神通力第一の目蓮は毎日八戒（八戒とは僧でない者が一日一

夜を限りて受持す僧の戒律であつて八關齋戒とも云ふのである。即ち一、不殺生、二、不與取、三、不婬、四、不妄語、五、不飲酒、六、不塗飾香鬘歌舞觀聽、七、不坐高廣嚴麗牀座、八、不過中食であるを授け、又説法の第一人者の富樓那が毎日説法して居つたので王の心は次第に淨め高められて顔色も和らく悦びに満ちてゐたのである。この有様を經典に「顔色和悅」と説いてゐる。三七日（廿一日）の日が經過して阿闍世が牢獄に王を尋ねて「今猶存在せしや」と云つて番人に尋ねたこれに對して番人は「國の大夫人身に魅密をぬり瓔珞に漿を入れて王にすゝむ、沙門目蓮及富樓那は空より來りて王の爲に法を説く禁制すべからず」と答へたに對し阿闍世は烈火の如く憤り「我が母は賊である。沙門は惡人であり、幻惑の咒術を以てこの私を多日死せざらしむ」と叫んで利劍を抜きはなつて母韋提希を刺そうとしたのであるが月光と耆婆と云ふ二人の大臣に制せられて殺すことが出来なかつた。月光は「聰明多智」の人として經典に現はれてゐる。又耆婆は阿闍世の從兄であるが其の母が王族でない爲臣下となつてゐる。その上名醫として知られてゐる人である。この二人は若い王阿闍世に對して勢力のあつたことは涅槃經と云ふ經典によつても解るのである。この二人は國位を貪る爲に父王を害するものは多くあるが未だ會て母を殺すものは聞いたことはない。今若しこの殺害をなしたならば王族を汚すものであつてこれ梅陀羅（古代印度の賤しい種族）と同じである。又王として載くことは出来ない」と云つて諫めたのである。そこで遂に阿闍世は二人の諫言を聞いて韋提希夫人を宮殿内の奥の一室に幽閉したのである。

こゝを觀經和讚第三第四、第五に

「阿闍世王ハ瞋怒シテ

我母是賊トシメシテゾ

無道ニハ、ヲ害セシムト

ツルギヲヌキテムカヒケル

耆婆月光ネムゴロニ

是梅陀羅トハヂシメテ

不宜住此ト奏シテゾ

闍王ノ逆心イサメケル

耆婆大臣オサエテゾ

却行而退セシメツ、

闍王ツルギヲステシメテ

韋提ヲミヤニ禁ジケル」と。

韋提希夫人は幽閉せられて心身共にやつれ亂れて惱み苦しむのである。それから間もなく頻婆娑羅王は獄死するのであるが、それからまず／＼絶望の極に達したのである。その絶望の深淵の底に一筋の希望の道を開いてくれるものは釋尊よりないと知り遙かに説法して居られる。耆闍崛山に向つてお願いするのである。苦惱のどん底にあえぐ私の爲に目蓮と阿難をお使はして下さいと云つて、雨涙して悲泣するのである。そうして又再び釋尊の方へ向つて禮拜し奉るのである。その時釋尊は自ら目蓮阿難を左右に従へ空中より現はれ給ふたのである。この時韋提希夫人は釋尊を見たてまつりて何を思ひ、何を感じたか、自ら胸に飾つた瓔珞を絶ち切り身體を大地に投げつけて號泣して、

「世尊私は昔何の罪あつてかこの惡子を生んだのか、又、世尊何の因縁によつて提婆達多と共に親類であるのか」と。

この惡人提婆にそゝのかされて我が子阿闍世は、この様な逆惡を犯した提婆さえ居らなかつたならば、我々はこの様な目にあふ筈がなかつたのである。この王舎城の事變の責任の大半は世尊にあると云つて怨みの眼で釋尊を

見たのである。これは愚痴であつてこの様な愚痴に對して釋尊は答へられる筈はなく、たゞ沈黙を以て答へ給ふより外になかつたのであるそこで草提希夫人は更に

「何卒私の爲に苦惱なき所を説いて下さい我々の世界は地獄、餓鬼、畜生、滿ちみちて悪い者が多い心からお願ひします」と。

苦惱なき處は清淨の業によつて現成せられる世界である。即ち佛の境界より外にないのである。そこで釋尊は清淨業の處を觀ぜしめんが爲に眉間より光を放ちて十方無量の世界の中で、清淨業の世界だけを草提希夫人に見せしめる爲に其の金色の光は釋尊の頭上に還つて、須彌山のやうな金台となり十方諸佛の清淨の國土が皆其の中に現はれて、草提希夫人に見せしめ給ふたのである。草提希はこれらの諸佛の世界を拜見して釋尊に

「このもろくの佛土皆清淨であつて光明はあるけれども私は極樂世界の阿彌陀佛の所に生れたいと思ひます何卒生れる方法を教えて下さい」と。

お願ひするのである。

極樂世界（安樂世界）に生れたいと願ふたのは草提希夫人であろうけれども、安樂世界を選ばしめ給ふたのは釋尊の甚深のおぼしめしであつたのである。

これを親鸞聖人は觀經和讃第一に

「恩徳廣大釋迦如來

草提夫人ニ勅シテゾ

光台現國ノソノナカニ

安樂世界ヲエラバシム」と。

苦惱の深淵に落ちこんで悲泣していた韋提希夫人の心は次第次第に正しい方向に向つて來たのである。その時釋尊は今こそ本當に苦惱の韋提希夫人にはたらしめる時であるとして、微笑し給ふのである。即ちこの微笑こそは韋提希の救はれる時機の到來を示してゐるのである。釋尊はそこで韋提希夫人に

「貴女は今知つてゐるか、それとも知らないか、阿彌陀佛はこゝを去ること遠くはないのである。貴女の身邊に近くましますのであるが、無明煩惱の雲にさへぎられて見たてまつることが出来ないのである。それ故一心に念を心にかけて煩惱の無い清淨業によつて成り給へる阿彌陀佛を明らかに觀ぜなければならぬ。私は今貴女の爲に種々の方面を説いて、西方極樂世界に生れる清淨の業を示すであらう。これは貴女のみではなく、一切の凡夫が淨業を修したいと思ふものに西方淨土に往生する方法を廣く教えるであらう……」

と申されて説法を續けて行かれるのである

三

今こゝに韋提希夫人の人間性を考察するに、凡そ人間が生きると云ふことは苦しむと云ふことであつて、苦しみなくして人は生きることが出来ないのである。又成長することも出来ないのである。その生きる爲に色々の苦惱にあひ、苦惱の中にあえぐのである。そうゆう人間の代表として韋提希夫人が觀無量壽經に登場して、全人類の前に立つたのである。觀經はこうゆう人間に對する説法である。觀經は單なる悲しい物語りでもなく、又一篇の詩でもない、それは人間の血の流れの美しさである。一と皮めくればその下に三惡（地獄、餓鬼、畜生）の炎

が燃えて、その上を血の河が流れてゐる。そこにそゝがれる釋尊の熱い涙を感じしめるのである。この觀無量壽經は、梵本も異譯もない所から非佛説の學説などあるが、今はこれに對する論説をさし置くことゝする。

この觀無量壽經は前に述べた如く、韋提希夫人の苦悶と轉心と救濟の過程を主題として説いてゐるのである。扱て七重の牢獄に投ぜられた頻婆娑羅王が、目蓮を想ふた様に韋提希夫人は、先づ阿難を想ふたのである。なぜかと云へば阿難は豊かな感情の人であつて、美しい純情の爲に一生涯禍ひせられて苦しんだ人である。この場合韋提希夫人は私と一緒に泣いてくれる人は、この地上に阿難より外にないと信じて温かい慰問を求めてゐるのである。これは我々人間の情として一應韋提希の心を領得することが出来る。目蓮と阿難との來訪を請ふたに拘らず、釋尊おん自ら兩弟子をつれて來臨されたのである。それは何故であらうか。

こゝを親鸞聖人は大勢至菩薩和讚第五に

「子ノ母ヲオモフガゴトクニテ 衆生佛ヲ憶スレバ

現前當來トヲカラズ 如來ノ拜見ウタガハズ」と。

述べて居られる如く佛は佛を見んことを眞實に願ふものゝ前に來現し給ふのである。韋提希夫人は愚かな人間であつて、語るべき領解もなく、述べるべき理想もなく、たゞ苦しさ、切なさのあまり人間の温かい言葉と心とを痛切に求めてゐるのである。韋提希夫人の波立つてゐる心の奥底に眞實の人間の聲が横はつてゐる。人間の魂が血まみれになつて蠢めいてゐる。それを韋提希は悲しいかな知らないのである。知らずにゐるが、而し釋尊は今こそ血にまみれて、のたうつてゐる人間に眞實に語りかける絶好のチャンスである。韋提希夫人は自己を失ひか

けてゐるのであるから謙虚に法を聞くことが出来ないのである。そこで釋尊は請はれざるに態々來臨して居られるのは、韋提希の心のまゝが全人類の願ひであるからである。韋提希夫人に語りながら常に一切の人々に語つて居られることが伺はれるのである。

釋尊のお姿を見て喜ばなければならぬのに愚痴を述べてゐる。即ち韋提希自身が作り出した事件に拘らず、自己の立場を見ようとせずして提婆は惡人であり、阿闍世は惡子であり、この世界は濁惡の世界であり、この濁惡の世界はどうして現はれたのか、惡子はどうして惡子になつたか、と概嘆してゐるのである。この濁惡の世界は濁惡の人々そのものが作り出したものでなければならぬ。そうして韋提希夫人は濁惡の衆生ではなかつたのか、惡子阿闍世が世の中に現はれたのは罪もない。仙人を無理矢理に殺害したからではなかつたか、この世の中の地獄、餓鬼、畜生が滿ち／＼してゐるのは他に悪い者が多いからではなくして、韋提希夫人自らも作り出したものではなかつたのか、韋提希はこの突然な境遇の變化に心が錯亂して、靜かに自己の背後を見る眼を失つてゐるのである。

韋提希夫人にとつては惡と云ふものは自分以外のみあるものゝ如くである。こうゆう心を現はしながらの懺悔は眞の懺悔とは受けとれないのである、この頑強な心の方角を正しい方角に向きかえる、それが宗教への第一歩である。釋尊は如何にこのことについて、深い注意を拂つてゐられるかを見て行きたいと思ふ。

韋提希夫人の心の奥底に秘められた願、それは眞實の世界を求め人間の声である。而るに韋提希はこの一大事をハッキリ意識せずにとゞ心の表面、即ち現實の苦惱の爲に惑ふてゐるのである。故に苦惱のない處ならば何

處でもよいのである。その苦惱を作りつゝあるものは誰であるか解らないのである。作りつゝある自己が解らないのである。自己こそ間違ひのない濁惡の果實である。苦惱のなき處は清淨の業によつて現成せられる世界であつて、佛の世界より外にないのである。

そこで釋尊が韋提希に申されるに

「汝はこれ凡夫であつて心想羸劣である未だ天眼を得てゐないから遠くを觀ることは出来ない。諸佛如來、異の方便まし／＼て汝を見ることが出来る」と。

こゝまで云はなければ自らの愚劣を知らない無明の人間である。心の劣りはた泥凡夫に自らの力で自らの愚劣を知らないのである。愚中の愚であり、極惡中の極惡であり、狂中の極狂であり、愚禿であると云ふことは眞實（佛）の光に照し出された親鸞聖人であつてこそ云えるのであり、大乘圓頓戒の菩薩傳教大師であつて、初めに云えることである。智慧第一の法然上人は眞實（佛）の智慧により十惡愚痴の法然房を見たのである。自らの煩惱と無知によつて苦惱し自らの濁惡不善によつて五苦（生苦、老苦、病苦、死苦、愛別離苦）に責められてゐるのが韋提希夫人であり我々人間である。而るに韋提希の眼は未だ外にのみ向つてゐるのである。この鈍根無智の韋提希をどうして自らの眞實の相に開眼せしめるのか、それは觀無量壽經所説の十六觀法は、この愚痴惡見の韋提希及び我々一切の人類の表皮を一枚／＼笱の子の皮を剥ぐやうに剥ぎとつてゐられるのである。韋提希夫人は自らの心の愚さ弱さを濁惡さを自覺してゐないのである。この爲に自らの何物であるかを見せしめる爲に十六の觀法を説かれたのである。これによつて韋提希は果して何を待たであらうか、恐らく韋提希の得たものは觀

法の堪えがたき自己、即ち堪えることの出来ない哀れな自己の器量を見るばかりであつたであらうと思ふ。

十六の觀法とは、一、日想觀、二、水想觀、三、地想觀、四、寶樹觀、五、寶池觀、六、寶樓觀、七、萃座觀、八、像觀、九、眞身觀、十、觀音觀、十一、勢至觀、十二、普觀、十三、雜觀、十四、上輩觀、十五、中輩觀、十六、下輩觀である。其中第一觀より第七觀までは依報を觀想するものであつて第八觀から第十三觀までを正報に對する觀法である。依報とは我々衆生の依りどころであつて、山河大地、園林邸宅等である。正報とは過去の業因によつて正しく報いられて得てゐる果報であつて衆生の心身そのものである。十六觀の上十三種を定善觀と下三觀を散善觀とに分けられるのである。定善とは息慮凝心であつて心を靜め散亂の心を凝らして三昧に入つて、淨土を觀想することであり、散善とは廢惡修善であつて、淨土往生の行を修することである。(一一の解説を省略す)

釋尊は韋提希夫人が十六觀法に相應する人間であると見てお説きになつたのではなくて、この觀法に堪えることの出来ない哀れな人間であることを知らしめて直ちに如來の眞實に投入せんとする釋尊の善巧方便である。人間の愚痴の深かさの底なきことに驚かざるを得ないのである。この永却の深き心の闇の底に深き大悲の光が輝き動くのである。

釋尊が第六觀法の説法が終ると嚴やかな調子で

「まさに汝(韋提希)が爲に苦惱を除く法を説く分別解説すべし汝等(阿難及び韋提希)憶持して廣く大衆の爲に分別解説すべし」と。

このお言葉が終ると同時に無量壽佛(阿彌陀佛)が左右に觀世音菩薩大勢至菩薩を從え(觀世音菩薩は佛の大慈

悲を現はし、大勢至菩薩は佛の大智慧を表示するものである。空中に住立して照し給ふたのである。而しこれは一瞬間の光景であつたであらうけれども、その一瞬間の來現が無始以來の韋提希の過去を照し出し、末來際を盡しての韋提希を攝めとるものである。韋提希はこの住立空中の阿彌陀佛を拜見するとともに救はれたのである。

もし韋提希夫人が十六觀法に堪え得るものであるならば、住立空中の阿彌陀佛の出現は必要のないことであるが、これこそ釋尊の意圖せられた所であつたのである。「即ち韋提希は余りにも心の愚さ弱さに悲しんでゐないのである。自己の眞實の價値を知らないのであつて、又救はれないことを知らないのである。この様な韋提希に直ちに本願の念佛を説いても信受することが出来ないから、韋提希自らの何物であるかを見せしめる爲に十六の觀法（自力修行）を説き給ふたのである。これ全く釋尊の濫かゝい、大きな慈悲の現はれであると拜せらるゝのである。韋提希は住立空中の阿彌陀佛を拜見した時に一言の言葉もなく拜見し終つて釋尊に兩手をさしのべて掌を以て釋尊の足を受け自らの頭に接けて頂き禮拜してそこで初めて

「佛力に因るが故に……」と。

述べてゐる。獲信の一念に人は何事も云ふべき言葉は持たないのである。言葉の無きことこそ最上の言葉ではなからうか、こゝに於て住立空中の大説法があるのである。

深甚の大慈悲心が瀧の如くに韋提希の全身心に注がれて全身心をゆり動かし全身心を包み攝め取つて余す所なく照してゐるのである。これはそのまゝ我々地上の人間、即ち極惡最下の愚人が最も烈しく照し出されてゐるのであつて、こゝに於て強い自我の否定愚痴無知の自己が自覺さゝれるのである。

韋提希夫人の信仰を永遠にゆるぎなきものとして、表示してゐるのは即ち我々人間が現實に於て惡を惡として知らない無底の愚人の救はれることを立證してゐるものである。

四

最後に韋提希夫人と云ふ代表的な愚痴の一女性が佛のみ光に照し出されて懺悔に轉じたが、其の後如何に變化して行つたか、又觀無量壽經では、阿闍世は韋提希夫人を座敷牢に幽閉した所で登場せずに終つてゐるが、共に其の後の經緯は涅槃經（梵行品）と云ふ經典に美しく描寫されてゐるのである。

阿闍世は其の後煩悶を重ねて

「自分は父頻婆娑羅王を罪もないのに獄死させてしまつた。又母を座敷牢に入れて苦しめたこんな人間は生きながらにして無間地獄に落ちてしまふ」と。

云つて苦しみ始めるのである。それと同時に身體には臭い出來物が體全體に出來て來るのである。これを見た韋提希は前の愚痴の女性ではなく今は佛の大慈悲に浴した韋提希であるが故に阿闍世に對し父母を苦しめた報ひであると云ふ様な愚痴を一言も云はずして、涙を以て阿闍世を心から看病してゐるのである。この母親の沈黙の看護涙をもつて極惡の子を看病してゐる。そこにすでに佛の大慈悲と云ふものが、母親韋提希の涙を通して阿闍世に響いてゐるのである。多くの臣下達が阿闍世に對して色々と慰めの言葉を與えるが、それは何の役にも立たない。人生問題の苦しみが大きくなればなるほど理論とか哲學等で、その苦しみが解決出來るものではないのであ

る。而らばこの問題は如何にして解決出来るのであるか、こゝに最後に現はれたのが先に諫言した耆婆大臣である。

耆婆は

「大王は罪をおつくりになつた而し今大王の心には非常に後悔と慚愧の心を起して居られる一には慚であり、二に愧である慚は自ら罪をつくらない。愧は人に罪をつくらせない、慚は自己に恥ぢ愧は世間に恥ぢる。慚は人に恥ぢ愧は天に恥ぢ、これを慚愧と云ひ、無慚愧は人ではない畜生である。この慚愧が人間にとつて一番大切である。王は今この慚愧の心を起して居られます。大王はこの病氣を治す人は無いと云はれますが、この病氣を治す唯一人のお方こそ釋尊である釋尊のお力によつて必ず救はれ給ふであらう」と。云つて

釋尊の御許へ行くよう勧めるのである。その時天上より聲が響いて

「自分は今汝を啓むが故に勧めてみちびくのである」と。

阿闍世は非常に怖れ慄えて空からの聲は誰かと尋ねると又空から聲が響いて、

「我は汝が父頻婆娑羅である汝は耆婆の云ふことを聞けよ邪慳な他の臣下の云ふことを聞くな」と。

此々に阿闍世は悶絶して大地に倒れるのである。これを見た韋提希は靜かに看護するのである。空中からの聲が響いて來たと云ふことは、父頻婆娑羅王の生前の教が始めて阿闍世に響いたことである。この世を去つた父、この世にあつて黙つて看病してくれる母親に促されて阿闍世が釋尊のみ許え教へを請ひに行くのである。何が阿闍世をそうさせたか、それは韋提希の親心である信仰に徹した韋提希は、阿闍世の苦しむ相を見て己れ自身もそれ

と共に苦しむ心を以て黙って樂を塗つてやつて看病するのである。韋提希の生活は靜かにその苦しみに従ひ、その苦しみを自分に負ふてゐるのである。説法する母でもなく怨みを返す母でもなく、今は苦しみの中に靜かに隨順の生活をしてゐるのである。黙々としてゐる。其の母韋提希夫人を通して阿闍世に親心が響いて來るのである。韋提希は阿闍世をどこ／＼までも理解し、常に阿闍世の生命と一つになつて生きてゐるのである。この偉大な母性愛の力によつて阿闍世は廻心懺悔せしめられるのである。

釋尊は今や娑羅双樹の蔭で靜かに涅槃に入られんとする時阿闍世が悶絶して大地に倒れて苦しんでゐる。その苦しみを御自身の苦しみとして共に苦しむと云ふ親心から「爲阿闍世王不入涅槃」と。即ち阿闍世の爲に涅槃に入らずとのお心が動くのである。釋尊の大慈悲心が阿闍世の身心に觸れてゆき、阿闍世の生命にまどひつき、離れずの一つになつて動くのである。佛の慈悲心と云ふものは、相對的な同情的なものではなくて生きた問題である。阿闍世は單なる阿闍世ではなくて我々一切衆生の代表者である。即ち阿闍世の苦しみは一切衆生の苦しみでなければならぬ。その苦しむ衆生と佛は一味になつて活躍し給ふのである。それは永遠絶對の生きた眞實の動きである。人生問題に苦しむ其の我々の生命に生きて働き、我々の心と共に生きて動く大いなるまことである。即ち久遠の佛のまことは我々の生命と一つになつて、我々の生命の上に徹して下さるのである。

以上

(本學助教 宗教學)